

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第**63**号

平成19年 10・11・12月



重要文化財 舞楽面〈新鳥蘇〉奈良・春日大社

特別展

第59回 正倉院展

10月27日(土)～11月12日(月)
東・西新館

特別陳列

おん祭と春日信仰の美術

12月8日(土)～1月20日(日)
東新館

特集展示

奈良で甦る縄文の世界

—小野忠正コレクション—

12月8日(土)～1月14日(月・祝)
西新館

平常展

仏教美術の名品

本館 平常開館
西新館 12月8日(土)～

中国古代青銅器

本館 平常開館



さいえのぶつぞうばん
彩絵仏像幡（部分）



あかしにきてんがいのちようかざりはながたさいもんぜんけつ
赤地錦天蓋頂飾花形裁文残欠



し たんきんでんのえどう う
紫檀金銅柄香炉（部分）

第59回 正倉院展

10月27日(土)～11月12日(月)

東・西新館

正倉院宝庫は秋の二ヶ月ほど勅封が解かれ、宝物の曝涼が行われます。正倉院展は九千件におよぶ宝物の中から七十点ほどを選び公開するもので、今年で五十九回を数えます。

今年の出陳品は、聖武天皇の遺愛品、大仏開眼会の際に皇族や貴族たちが献納した品々、東大寺で用いられた仏具、楽器、染織品、遊戯具、文房具など多岐にわたっています。このうち、羊木膺縹屏風は聖武天皇の身近に置かれた調度品で、日本人が西域の意匠を取り入れて製作した興味深い品です。奈良時代の工匠たちが、西域や唐の文化をたくみに吸収していたことがうかがえます。また、数ある仏具の中でもっとも華麗な品として名高い紫檀金銅柄香炉をはじめ、琥碧誦数、金銀平脱皮箱、曲芸や奇術をする人物をいきいきと描写した墨絵彈弓、仏像を描いた異色の幡である彩絵仏像幡など、見応えのある宝物が数多く出陳されます。また、正倉院宝物の魅力は、一般の人々の暮らしを伝える品が多く含まれていることにもあります。今回出陳の白布は税として地方より納められた麻布ですが、あわせて麻布を用いて作られた作業着も出陳されており、当時の社会を知る上でも興味深いものです。文書には正税帳、戸籍などの公文書のほか、東大寺の寺務に関わる文書などもあり、奈良時代の歴史をいきいきと伝えてくれます。

正倉院展の時期、古都奈良は紅葉に彩られます。ぜひ錦秋の奈良に脚を運び、正倉院宝物の織りなす天平美をご観賞ください。



すみえのだんきゅう
墨絵彈弓（部分）



せいりんせいのきずり
青斑石碗



かやのまごころくきよく
権双六局



ひつじきさうけちのひょうぶ
羊木膺縹屏風

特別陳列

おん祭と春日信仰の美術

12月8日(土)～1月20日(日)
東新館

奈良の歳末を飾る風物詩・春日若宮おん祭は、保延二年(一一三六)九月十七日にはじまつたとされています。その後、祭日は室町時代から十一月二十七日、明治十一年(一八七八)からは現行の十二月十七日と日付こそ変わりましたが、その間絶えることなく続いたとされ、今年で八七二回を数えます。

この展覧会では、おん祭の行われる時期に合わせ、主祭神である若宮神やおん祭に関わる品々を集め、展示を通じておん祭の一端に触れていただきます。また春日信仰に関わる遺例を併せて紹介し、春日信仰の広がりと同様性を感じていただきます。

今も昔も盛儀を誇る南都の一大祭礼絵巻を、展示室でもお楽しみ下さい。



春日若宮御祭礼絵巻(中巻) 奈良・春日大社



盃台 奈良・春日大社



◎諸尊図像(文殊菩薩騎獅像納入品) 奈良・西大寺



春日鹿曼荼羅 奈良・西城戸町

特集展示

奈良で甦る縄文の世界～小野忠正コレクション～

12月8日(土)～1月14日(月・祝) 西新館



土偶

平成十八年、当館の所蔵品に新しいコレクションが加わりました。それは、戦前から戦後にかけて青森県在住の故小野忠正氏によって蒐集された、二万点を超える縄文コレクションです。各遺物の註記から大部分が青森県・岩手県で出土したものと分かります。この度、この中から選りすぐりの遺物を展示し、初めてその全貌を紹介します。

本コレクションは石鏃や磨製石斧、石棒などの石器類、簪や針、釣針や鉋などの骨角製品、ミニチュア土器を含む縄文土器、信仰に関わるとされる土偶や土板・岩版などから構成されています。特に注目されるのは縄文土器です。磨消縄文や磨きなどで美しく装飾され、亀ヶ岡文化(縄文時代晩期)の特徴を色濃く反映した「亀ヶ岡式土器」が多く含まれます。漆塗土器や香炉形土器、人面付土器など珍しい土器にも注目ください。

縄文文化は東日本で花開きました。縄文の遺跡分布が比較的希薄な関西でこうした多彩な縄文文化に親しむ機会はこれまで殆どありませんでした。今後は、本資料の整理を進め、幅広い公開・活用を目指していく予定です。



縄文土器各種



三角壺形土製品・内面渦巻状土製品・土板・岩版

天馬を追って ソグド人の壁画探訪

吉澤 悟（当館資料室長）

この夏、機縁を得て中央アジアにソグド人の壁画を観ることができた。ウズベキスタンの古都サマルカンドには、「アフラシャブの丘」と呼ばれる広大な都城遺跡が存在する。チンギスハンのモンゴル軍によつて壊滅的な被害を受けるまで、ここはソグド人の王都であり、玄奘の『大唐西域記』には「颶林建国（サマルカンド）」「すべての胡国の中心」「諸国の貴重な産物がこの国に集まる」と記された土地である。ソグド人は中央アジアを拠点としたイラン系の住人。西はビザンツ帝国内から東は唐の長安まで広域な商業活動に関与し、シルクロードによる東西文化の架け橋となった人々である。正倉院の香木にソグド文字が刻まれているのを存じの方も多いであろう。

壁画は一九六五年の発掘調査で、アフラシャブ遺跡の一面、王族の離宮ないし貴族邸宅と目される建物から三面が発見された。ソグド王ウアルフマンを含む行列が生贄を運ぶ光景、あるいは唐皇帝の騎馬姿や船にのる女性たちなどを描いた七世紀後半頃のもので、遺跡に隣接する考古学博物館に、剥ぎ取り・修復済みのものが展示公開されている。

ところで、以前に読んだ書物に、この壁画の中には天馬（ベガス）がみられると書かれていた。実は、奈良国立博物館では来春に「天馬



動物文様の服を着たソグド人

伝説とシルクロード」と題する特別展を予定している。ギリシア神話でおなじみのベガスをはじめ、西アジアや中国、そして日本に伝わる有翼馬や天馬に関する作品を集め、シルクロードを舞台にした文化交流の一端に迫ろうという試みである（二〇〇八年四月五日～六月一日）。この「天馬展」のために壁画を借り出すのは無理にしても、それを間近かに観察し、展覧会の知的背景に生かして行きたい、そんな想いから今回の見学を大いに楽しみにしていた。

しかし、いざ壁画の展示室に入ってみると、どこにも天馬の姿は見つからない。ソグド人を乗せた駱駝や馬の姿は大きく描かれ目を惹くが、肝心の翼がない。保存状態が悪いために展示されていないの

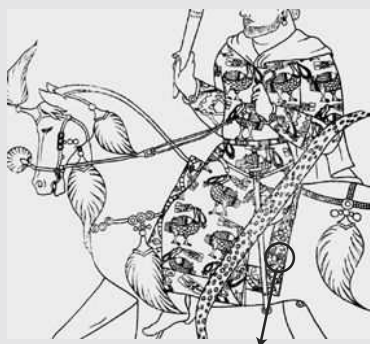


アフラシャブの丘

たか、そんな勘繰りさへはじめる始末である。ふと目前の布地の図柄を見違つたところ、連珠文に囲まれた小さな馬の足や翼が、半分隠れるように描かれているのに気づいた。天馬だけではなく、鷺、鳥や猪、山羊、グリフィン（翼をもった獅子）、シームルグ（翼をもった犬の半身像。メソポタミア起源）など、様々な動物が布柄として描かれているのである。一歩下がって見直すと、探していた天馬は、馬鞍に覆いかけた敷物の縁にデザインされていた。壁画の主題はあくまで実存の人物や動物の群像。想像上の動物や、綬帯を付けた特別な動物たちは、布地の図柄に留められており、吉祥や神聖を表す文様とされていたのである。

さて、無事発見の天馬であるが、翼の先はくると曲がり、根元には連珠文の飾りが付けられている。前脚の一方を軽く上げる姿態で、首には綬帯、足にリボン、体には三角形の文様がみられる。この図柄は、エジプトのアンティノエ出土の天馬文錦に非常によく似ている。また、ササン朝ペルシアの王侯狩獵文銀皿には足にリボンを付けた馬が多くみられる。連珠文がペルシア起源であることはよく指摘されることである。壁画に描かれた布がどこで作られたか知る由もないが、デザインはやはりペルシアとみて間違いなからう。祭礼のハレ着とはいえず、壁画の人物たちが連珠文と動物文で飾られた服地を惜しげもなく着けているところを見ると、布地はソグド人たちが自ら作ったものかもしれない。彼らが天山山脈を越え、タクラマカン砂漠を渡り、中国にこれを伝えた。西域情緒をかもし「胡風」を好んだ唐の人々がこれを写し、やがては日本へと…。

はるかなる天馬



天馬の文様（描きおこし図）



壁画の展示室



扁壺 当館(坂本コレクション)



大將軍神坐像 当館



菩薩立像 興福院



〇十一面観音立像 勝林寺



〇薬師如来立像 元興寺

平常展

仏教美術の名品

本館第1・13室

彫刻

第1室

【大和の仏たち】●木造多聞天立像(法隆寺)●木造薬師如来立像(元興寺)●木造虚空蔵菩薩坐像(北僧坊)●木造十二面観音立像(松尾寺)●脱活乾漆・木造梵天立像●脱活乾漆・木造伝教脱菩薩立像(以上、秋篠寺)●木造持国天立像●木造多聞天立像●木造西大門勅額(以上、東大寺)●脱活乾漆舍利弗立像●脱活乾漆目犍連立像●板彫十二神将像(11月25日)●脱活乾漆緊那羅立像(11月27日)(以上、興福寺)●木造十一面観音立像(勝林寺)(11月27日)●木造十一面観音立像(地福寺)(11月27日)●木心乾漆阿閼如来坐像正坐像(岡寺)●木心乾漆阿閼如来坐像(西大寺)●木造紅玻璃阿彌陀坐像(當麻寺)●木造伝行賀坐像(興福寺)●銅造誕生釈迦仏立像・灌仏盤(東大寺)●木心乾漆文殊菩薩坐像(薬師寺)●木造弥勒仏坐像(東大寺)(11月25日)●木造大黒天立像(興福寺)(11月25日)●木造大黒天立像(西大寺)(11月25日)●銅造薬師如来坐像(11月27日)●木造菩薩立像(金竜寺)(11月27日)

第2室

【注目の逸品】●木造准胝観音立像(個人)【興福寺伝来の四天王像】●木造増長天立像(当館)●木造広目天立像(興福寺)●木造多聞天立像(当館)

【観音菩薩】

●木造十一面観音立像(薬師寺)●木造千手観音立像(園城寺)●木造千手観音立像(妙法院)●木造十一面観音立像(元興寺)

【迎講の阿弥陀仏】●木造阿弥陀如来立像(裸形)(浄土寺)

第3室

【仏の荘厳】●木心乾漆光背・木造蓮弁(以

上、聖林寺)●木造蓮台(十輪寺)●銅造光背(当館)●木造光背(當麻寺)●木造仏坐像(光背化仏)●木造飛天(以上、興福寺)●木造阿弥陀如来像台座(金堂西の間所用)●木造天蓋(金堂西の間所用)(以上、法隆寺)

第4室

【ガンダーラの彫刻】石造菩薩立像、石造仏伝図浮彫(以上、当館)【中国石窟寺院の仏像】石造如来頭部(雲岡)●石造菩薩頭部(華嚴寺)●石造菩薩頭部(響堂山)●石造螺髻像頭部(響堂山)(以上、個人)

【中国・朝鮮半島の金銅仏】銅造二仏並坐像(当館)●銅造誕生釈迦仏立像●銅造押出五尊仏●銅造供養者坐像●銅造観音菩薩立像●銅造力士立像●銅造力士立像(以上、個人)●銅造如来立像(光明寺)●銅造如来立像(当館)

第5・6室

【中国の仏像】木造菩薩坐像、石造仏坐像(以上、個人)●木造諸尊仏像(寂照寺)●石造十一面観音立像●石造三尊仏像(以上、当館)●石造三尊仏像、石造仏五尊碑像、石造仏立像、石造仏浄土碑像(以上、個人)

第7室

【舞楽面】●舞楽面(散手)●舞楽面(貴徳)

【注目の逸品】

准胝観音立像

個人
木造 彩色
平安時代(十世紀)
重要文化財



准胝観音は真言系寺院でまつられる六観音像のうち二体の一つとなるが、単独でまつられることもある。三眼・十八臂の像が一般的だが、本像のように二眼の作例もある。腕の数については、原容が変更されている可能性があり、当初の姿の復原は難しい。サクラ材を用いた木造の像。丸太を思わせる厚みある体軀は古様だが、表情は穏和で、過渡的な様相も認められる。台座蓮弁に天禄元年(九七〇)の年紀のあることで著名な像だが、台座と本体との具性に疑問がある。(岩田茂樹)

(以上、東大寺)●舞楽面(新鳥蘇)(春日大社)●舞楽面(胡徳楽)(個人)

第8室

【金銅仏】●銅板法華説相図(長谷寺)●銅造菩薩立像(興福院)●銅造十二面観音立像(仏像型)(一乗寺)●銅造菩薩立像(法起寺)●銅造観音菩薩立像(法隆寺)●銅造菩薩半跏像(東大寺)●銅造観音菩薩立像(金剛寺)●銅造誕生釈迦仏立像(悟真寺)

【特集展示 塑像と埴仏】

●塑像断片(奈良県薬師寺西塔出土)●塑造人物頭部(奈良県本薬師寺出土)(以上、薬師寺)●侍者像(法隆寺塔本塑像)●塑造菩薩頭部(奈良県定林寺出土)(当館)●塑像断片(奈良県原寺裏山出土)(明日香村)●塑像断片(滋賀県雪野寺出土)(個人)●塑像断片(鳥取県青尾尾庵寺出土)●火頭形三尊埴仏(伝奈良県橘寺出土)(以上、当館)●方形三尊埴仏(奈良県川原寺裏山出土)●明日香村、六角形埴仏(三重県天華寺跡出土)(当館)●多宝塔埴仏(中国)(個人)

第9室

【釈迦如来】木造釈迦如来坐像(法隆寺)●木造釈迦如来坐像(東大寺)●木造出山釈迦立像●木造釈迦如来立像(清涼寺式)(以上、当館)●木造仏涅槃像(照源寺)

【阿弥陀如来】木造阿弥陀如来坐像(当館)●木造阿弥陀三尊像(峰定寺)●木造阿弥陀如来立像(個人)●木造阿弥陀如来坐像(西大寺)●銅造阿弥陀如来立像(善光寺式)(善光寺)

第10室

【地藏菩薩】木造地藏菩薩立像(十市町自治会)●木造地藏菩薩立像(大福寺)●木造地藏菩薩立像(新薬師寺)●木造地藏菩薩立像(長命寺)

第11室

【大日如来】木造大日如来坐像(元興寺町)●木造大日如来坐像(西城戸町)【僧形像】●木造伝龍猛菩薩立像(泰雲院)●木造僧形坐像(南明寺)【神像】木造大將軍神坐像(当館)●木造男神坐像(観音寺)【聖徳太子像】●木造聖徳太子立像(成福寺)●木造南無仏太子像(法起寺)

第12室

【動物彫刻】●木造狛犬●木造獅子頭(以上、手向山八幡宮)●木造狛犬●木造獅子(以上、当館)

第13室

【明王像】木造五大明王像(当館)●銅造不動明王立像(当館)●木造不動明王坐像(正寿院)●木造不動明王立像(個人)●木造不動明王坐像(園城寺)【天部像】●木造四天王立像(海住山寺)●木造十二神将立像(辰未(室生寺))●木造増長天立像(法明寺)

平常展

中国古代青銅器 坂本コレクション

本館第14・15室

中国古代の商・殷から漢時代に製作された、青銅器の逸品を展示しています。

爵、觚、觶、長頸尊、觚形尊、方彝、卣、罍、罍、鬲、甗、豆、盤、絶、盃、盃、盃、鐘、鈎、扁壺、蒜頭壺、甗、甗、博山炉、鎮子、鏡、鐙子など(当館)



○阿闍世王経 当館



○一遍聖絵〈第四巻〉 清浄光寺



○毘沙門天像 法隆寺



愛染明王香合仏 当館



○山代忌寸真作墓誌 当館

特集展示

奈良で甦る縄文の世界

小野忠正コレクション

西新館

12月8日(土)～1月14日(月・祝)

縄文土器・深鉢・浅鉢・壺・台付鉢・徳利形土器・注口土器・片口・椀・高杯・小型深鉢・小型鉢・小型壺・香炉型土器など、土製品(ミチナテ土器・土板・三角埴形土製品・土冠・三角形土板・内面渦巻状土製品・亀形土製品・鏢形土製品・土鈴・土錘・勾玉形土製品・ペンダント形土製品など)、土偶

石器(磨製石斧・石棒・石鏃・石匙・石錐・石槍・異形石器など)

石製品(石板・玉製品)

骨角貝製品(鈎・釣針・筥針・簪・鹿角製裝飾品など)

平常展

仏教美術の名品

〈考古・工芸・絵画・書跡〉

西新館

12月8日(土)～1月14日(月・祝)

考古

銅鈴(長崎・黒島出土)(当館)、銅鐸(妙国寺)、裝飾器台付子持壺、人物線刻裝飾器台付子持壺、埴輪(伝茨城県出土)、陶棺(奈良・西大寺出土)、○佐井寺僧道業墓出土品、○山代忌寸真作墓誌、白磁骨蔵器、○出雲荻古墓出土品、粉河経塚出土品、白浜経塚出土品以上、当館、○藤原道長願経(奈良・金峯山経塚出土)(金峯神社)、○紙本朱墨交書法華経(和歌山・王子神社経塚出土)(王子神社)、○銅板経(大分・長安寺経塚出土)(長安寺)、瓦経(福岡・飯盛山経塚出土)、青石経(愛媛・大日堂経塚出土)、泥塔経(鳥取・智積寺経塚出土)、黄釉男女俑、白磁壺、白磁龍耳瓶、三彩駱駝俑、三彩鏡、白磁唾壺、褐釉壺、黄釉褐彩貼花人物文水注、黄釉緑褐彩花文碗、青磁蓮弁文小壺、青磁双耳瓶、三彩盤、緑釉鶏冠壺(以上、当館)

工芸

●鉄宝塔(西大寺)、銭弘俣八万四千塔、銀製層塔形舍利容器及び金製内容器(銅宝篋印塔(以上、当館)、○三角五輪塔形舍利容器(浄土寺)、○宝塔形舍利容器、五輪塔嵌装舍利厨子、○木製宝塔(以上、当館)、金龜舍利塔(長谷寺)、百万塔および無垢浄光経陀羅尼、○宝篋印塔嵌装舍利厨子(以上、当館)、蓮唐草螺鈿経箱(個人)、菊唐草文螺鈿経箱(個人)、○鳳凰文鍍金経箱(当館)、○孔雀文鍍金経箱(浄土寺)、○金銅透彫経筒(万徳寺)、金銅経筒(施福寺)、愛染明王香合仏、愛染明王香合仏(以上、当館)、(線刻千手観音鏡像(松竹双鳥文)(個人)、○線刻十二尊鏡像(瑞花双鳥八稜鏡)、○木板彩画虚空蔵菩薩像(求聞持根本像)(以上、細見美術財団)、金銅阿弥陀如来像懸仏(個人)、○線刻阿弥陀如来鏡像(松喰鶴鏡)、線刻蔵王権現鏡像、男神対向鏡像、十二面観音懸仏、○山王十社本地懸仏(以上、当館)、○銅孔雀文磬(個人)、○銅草花文磬(峰定寺)、○宝相華文線刻連華形磬(赤松院)、銅孔雀文磬(当館)、○紙胎漆塗彩絵華籠(万徳寺)、竹製華籠(性海寺)、○金銀鍍透彫華籠(神照寺)、金銅鍍鉢杵(松尾寺)、金銅三鉢杵、金銅五鉢杵(以上、当館)、○金銅五鉢鈴(細見美術財団)、金剛盤、輪宝、羯磨(以上、当館)、金銅五鉢三摩耶鈴(個人)、○金銅五鉢四天王鈴(弥谷寺)、金胎兩界三摩耶形華瓶(持福寺)、金銅一面器(西大寺)

絵画

○九品来迎図(上品中・下生(瀧上寺)、阿弥陀来迎図、当麻曼荼羅(以上、当館)、○当麻曼荼羅縁起(當麻寺)、●一遍聖絵(第四巻)清浄光寺、扇面画帖(当館、仏涅槃図(成就院)、●十二天像(梵天)(西大寺)、○十二天像(当館)、○毘沙門天像(法隆寺)、○俱利伽羅龍劍二童子像、愛染明王像(以上、当館)

書跡

阿闍世王経卷下(五月一日経)、大般若経卷第五百八十八(魚養経(以上、当館)、○金光明最勝王経(百濟豊虫願経(西大寺)、

○紫紙金字法華経(乗宝寺)、○円珍俗姓系図、○円珍度縁并公験、○伝灯大法師位記(綾本)、○太政官給公験牒、○国清寺求法目録、○福州温州台州求法目録(以上、園城寺)、○前後(禅院額字)(東福寺)、○箸喰莊差図(談山神社)

パネル展示

修復文化財

地下回廊

○絵画 重要文化財 絹本着色四十九化仏阿弥陀来迎図(京都・光明寺)

○彫刻 重要文化財 木造持国天立像(内山永久寺伝来)(奈良・東大寺)

○工芸 国宝 毛抜形太刀(若宮御料古神宝のうち)(奈良・春日大社)

パネル展示

地下回廊

国宝 十一面観音像(当館蔵)の光学的調査

○国宝

○重要文化財

以上すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。

【表紙写真解説】

ぶがくめん しんとり そ

舞楽面(新鳥蘇)(奈良・春日大社)

平安時代 元暦2年(1185)

キリ材製の仮面。新鳥蘇は東北アジアに起源をもつ演目で高麗楽に属し、所用の面も韓国の仮面を想起させる特徴をもつ。目尻を下げ、頬に黒点を点じた朱色の円を描き、口を開けて歯列をみせる表情が何とも愉快である。(稲本泰生)

●展覧会日程●

	10 月	11 月	12 月
本 館	平常展(彫刻)・(中国古代青銅器) (～12/27) (1/2～)		
東 新 館	正倉院展(10/27～11/12)		特別陳列 おん祭と春日信仰の美術 (12/8～12/27) (1/2～1/20)
西 新 館			特集展示 奈良で甦る縄文の世界 (12/8～12/27) (1/2～1/14) 平常展(絵画・書跡・工芸・考古) (12/8～12/27) (1/2～)

展示評

「親と子のギャラリー」

仏さまの彩り」

夏休みということもあって、親子連れが目立った。また仏教美術からは一番距離がありそうな若いカップルが多いことは意外だった。仏教美術という、哲学的な雰囲気があったよい、それだけで敬遠してしまいがちだが、「仏さまの彩り」という柔らかいキャッチコピーが「ちよ」とのぞいてみようかな」という気持ちにさせているのかもしれない。

キャッチコピーだけでなく展示も工夫されている。「二河白道図」という鎌倉時代の仏画は、上部に極楽浄土、下部には現実世界、その間に火と水の河があり、白い一本の極楽浄土への道が描かれている。その横に仏画を拡大縮小したり、思いのままに絵の上を移動したりできるパソコン端末が設置されていた。自分が絵画中の一人になった気持ちで、極楽浄土へと移動していくことができるのだ。拡大した画面の中で移動していくと普段なら見落とすであろう金文様で飾られた浄土の地面の美しさに気付かされ、阿弥陀仏の衣の繊細な模様や寝殿のきらびやかな造りに感心している自分がいた。

さてまわりの親子連れの会話を耳を傾けてみよう。「紫紙金字華嚴経」という金色の文字で書かれた奈良時代の経典の前で、小学三年生くらいの女の子が、「金色で書いたのは、暗いところでも読みやすいようにかな。」

うーむ、子どもの発想はおもしろい。



「刺繍釈迦如来説法図」の前では、一人の男の子が、ハイビジョン映像で映し出された拡大画面と見比べながら、「お母さん、これ絵とちがって、刺繍や、刺繍。いやあ、ほんまびつくりしたわ」と、

食い入るように見つめている。どのような思いを込めて刺繍したの

だろう。刺繍自体に修行の意味があったのかもしれない。いずれにせよ、並々ならぬ情熱を感じさせられる。

後ろには刺繍体験コーナーがあり、順番待ちができていた。「この鎖繻いって、チェーン

スッチャやね。でもあんな大きいの大変やったやろな。」体験を通して、子どもが作品の価値を見出せるうまいしかけである。

奈良時代の「絵因果経」は、お経と絵で太子時代のお釈迦様の様子が描かれている。「この絵の中の人、みんなニンゴの手をしているよ。」「お経に4つも赤で書き直してあるところがある。」

子ども達はしっかりと展示品を見つめている。これほどまでに仏教美術と子どもとの距離を近づけることができる、思ってもみなかった。展示品のすばらしさとともに、展示方法の工夫に感動した私は、翌日、妻と娘を連れて再訪問させていただいた。

最後に「仏さまの彩り」の図録が、たったの二百円であったことに感動した。五十六ページ総カラー刷りの図録が、この値段。まったくもってありえない。聞くところによると、子ども達が自分のお小遣いから買うことで実現したとか。まるで奈良国立博物館から子ども達への「夏休みのプレゼント」のようなギャラリーである。



中澤 静男
(奈良市教育委員会 指導主事)

●公開講座●

【第59回正倉院展】

10月27日(土) 「正倉院の文房四宝」
角井 博 (渋谷区立松濤美術館館長)

11月3日(土)
「正倉院事務所の仕事ー受け継いできたもの、そして今」
杉本一樹 (宮内庁正倉院事務所保存課長)

11月10日(土)
「シルクロードをかけ抜けた動物たちー正倉院宝物の動物文様」
吉澤 悟 (当館資料室長)

※各回とも午後1時30分～3時(開場は午後1時)、当館講堂にて。聴講無料。定員200名。午後1時より講堂入口で整理券を配布します。

●サンデー・トーク●

10月21日(日) 「仏像調査からわかること」
岩田 茂樹 (当館美術室長)

11月18日(日) 「法隆寺金堂西の間天蓋について」
内藤 栄 (当館工芸考古室長)

12月16日(日) 「おん祭参観記」
清水 健 (当館研究員)

※各回とも午後2時～3時30分(開場は午後1時30分)、当館講堂にて。聴講無料。

●奈良国立博物館賛助会員

2007年9月1日現在、個人会員24名、団体会員13団体、特別賛助会員6団体のご登録を頂いております。

新規会員となられた方のご芳名をあげさせていただきます。

【団体会員】 株式会社 スタイルカフェ・ドット・ネット 様

京セラ株式会社 様

【個人会員】 永橋 肇 様 藤田 真介 様

*賛助会員に関するお問い合わせは、

奈良国立博物館 総務課 企画推進係まで。

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

〈会員大学等〉(9月1日現在)

奈良教育大学、帝塚山大学(帝塚山高校含む)、奈良女子大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、大阪教育大学、京都精華大学、京都橘大学、龍谷大学、京都大学、近畿大学文芸学部、奈良産業大学、奈良文化高等学校、奈良学園高等学校、奈良佐保短期大学、佛教大学、奈良大学、京都工芸繊維大学、同志社大学 文化情報学部、大阪成蹊大学 芸術学部、大阪大谷大学・大阪大谷大学短期大学部、種智院大学(順不同)

〈連携内容の変更についてのお知らせ〉

このたび、制度の一層の充実を図るため、本年9月から特別展の観覧料金を、これまでの団体(学生)料金から、400円に変更いたしました。

10月27日から開催される「第59回 正倉院展」も400円でご観覧いただけますので、ぜひご利用ください。

※ 学生証の提示をお願いいたします。

※ 共催展の場合は、従来どおり別途定めるものとします。

*キャンパスメンバーズに関するお問い合わせは、奈良国立博物館 総務課 企画推進係まで。

どうほうきょういんとう 銅宝篋印塔

奈良国立博物館
銅鑄製 高22.8cm
鎌倉時代(14世紀)

不思議な形の屋根の塔である。屋根は上面と軒下は階段状になり、軒先には火焰宝珠を表した飾りを立てている。この塔はよほど階段と縁があるらしく、基壇にも四段の階段を作っている。塔身は方形で、各面に三弁の火焰宝珠を飾り、屋根のいただきには相輪を立てている。

この形式の塔は宝篋印塔と呼ばれ、わが国では宝篋印陀羅尼や舍利を納めたほか、中世以降には墓石としても用いられている。中国・五代(十世紀)に多数製造された錢弘俶八万四千塔もこの形式を見せしており、おそらくわが国には中国から伝来したと思われる。釈迦の真舍利をまつるとされる、中国・寧波の阿育王寺の舍利塔もこの形式をとっていると言われ、中国では仏教の故郷インドゆかりの塔と見なされていたようである。錢弘俶八万四千塔にインド風の浮彫が表されたことも、このことをよく示している。しかし、インドに宝篋印塔とまったく同形式の塔はいまだ発見されていない。敢えて挙げるとすれば、7~8世紀のインドのストゥーパには、相輪の下に階段状で四隅に突起のある華盤を作るものが見られるから、あるいはこのような塔が宝篋印塔の起源かもしれない。

この作品では塔身に三弁宝珠を表している。これは内部に安置されている舍利を象徴的に表現したものであろう。平安時代以降、真言宗を中心に舍利を宝珠と同一視する教えが広まっていることから、この塔は舍利塔として用いられたことが推測される。

内藤栄(当館工芸考古室長)
西新館 12月8日(土)~1月14日(月・祝)

平常展の みどころ

しょそんぶつがん 諸尊仏龕

三重・寂照寺
木造 高18.6cm
中央アジア(7世紀頃)



最近発見された携帯用龕像の優品で、内部に三尊仏、涅槃像、菩薩像、力士像、樂人、供養者などが、非常に精緻な浮彫で彫出されている。江戸時代の朱漆銘があり、寛文年間(1661~73)の時点で高野山に伝来していたことがわかる。全体が砲弾型を呈し、一材を等分して一方を身とし、もう一方をさらに等分して左右の扉としている。龕形・彫刻様式とも中央アジア色が濃厚で、タクラマカン砂漠東北で発見された大英博物館蔵品(カラシャール出土)やメトロポリタン美術館蔵品(伝ホッチョ出土)などに近く、この地域で制作された可能性が高い。ただし裸形をとる力士の姿や漢人風の供養者の装束など、中国からの影響を想定できる要素も認められ、当地における東西交渉のあとがうかがえる。

銘にいう「弘法大師作」という伝承は信じがたいものの、中央アジアの龕像のうち、砲弾型を三分割するタイプでは世界唯一の完存例であり、空海将来品とみられる諸尊仏龕(唐時代、金剛峯寺、国宝)、同じく高野山に伝来した諸尊仏龕(唐時代、普門院、重文)などの源流や、檀像彫刻のわが国における受容の様相を考える上でも、比類ない価値をもつ。

稲本泰生(当館企画室長)
本館

開館予定(10月~12月)

■開館時間

午前9時30分~午後5時

※正倉院展の会期中は、午前9時~午後6時

※11月9日までの毎週金曜日と10月27日(土)、11月3日(土)、

11月10日(土)、12月17日(月)は午後7時まで

※いずれも入館は閉館30分前まで

■休館日

月曜日(祝日等の場合はその翌日)、12月28日(金)~1月1日(火)

※正倉院展の会期中は無休です。

※12月17日は開館します。

■「夫婦の日」割引

毎月22日(「夫婦の日」)にご夫婦で観覧される方は、一般料金の半額になります。

また11月22日は「イブウフ」と銘打ち、ご夫婦で来館される方は無料で観覧できます。

観覧料金

第59回 正倉院展

	一般	高校・大学生	中学生以下
当日	1,000円	700円	400円
前売、団体	900円	600円	300円
オートムレイト	700円	500円	200円

オートムレイトは、閉館の1時間30分前以降に販売する

当日券の料金です。(販売は当館当日券売場のみ)

※購入当日に限り有効

平常展・特別陳列

	一般	高校・大学生	中学生以下
個人	500円	250円	無料
団体	400円	200円	

団体は責任者が引率する20名以上



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用下さい。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒(90円切手貼付、宛名明記)を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。